

Essay In My Life

「文化」という日本語

～Culture 側からのアプローチ～

シンキング・バーズ

日本語研究班

耕すことを 「文化」に込める

日 本語の「文化」の意味を考える時に、英語の“culture”との関係を考えることは、避けて通ることができません。ご承知のとおり“culture”は、“cultivate（耕す、栽培する）”や“agriculture（農業）”などとグルーパル化できることばです。その起源は、ラテン語にまで遡ります。「文化」が、明治時代以降に使われるようになったのは、ケタちがいの歴史を持っています。それから、「土地を耕す」ことから始まっている点で、「文化」とは、出発点が全然ちがいます。今回の考察は、“culture”についてです。

●Cultureの類系語について

C ultureの語源をたどると、ラテン語の“cultûla”ということばに行き着きます。このことばは、“colere（耕作する、開墾する）”ということばの類系語と考えられています。基本的な語彙は、「耕作」と訳されています。“colere”の類系語には、“cultûla”のほかに“colonia（植民地域）”や“colônus（植民耕作者）”があるとみなせます。この4つの単語は、“colere”を軸にしたグループ語と言えるのです。右図のように、それぞれの単語は、「耕作する」土地と人と行為を表し

ています。“cultûla”は、行為を表す名詞です。

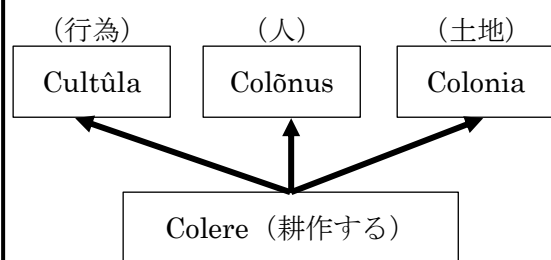
“cultûla”は、ラテン語系のスペイン語やフランス語に、似通った単語で派生しています。スペイン語では“cultura”、フランス語では“culture”が該当し、「耕作、開墾」の意味が生きています。ゲルマン語系のドイツ語でも、“Kultur”となり、同様の意味があるとされています。付随する意味として「教養、教化」などがあり、後から付加された意味を暗示しています。

地理的にイタリアに近いスペイン、フランス、ドイツに対して、イギリスは、ラテン語が直接流入したというより、フランスなどを經由して流入した、と見るのが妥当です。英語の“culture”は、「教養、教化」の意味が先行し、「耕作」と逆転したとワタシたちは考えます。「耕作」は、“cultivate”と“cultivation”が担うことになりました。


その英語の“culture”に、日本人は「文化」をあてました。それがいつ頃からは定かではありませんが、定着したのは戦後になってからとワタシたちは見えています。



ラテン語 Colere の主な類系語



● 「耕作」から生まれる Culture

 こまでの考察でもお分り頂けるように、英語の“culture”では「耕作」の意味が後退しています。必然的に日本語の「文化」から、「耕作」はイメージできません。「文」に「耕」の意味を与えることにも、無理があります。でも、「耕作」の意味がないことで生じる損失は、とても大きいのです。


フランスの主要な輸出品のひとつに、ワインがあります。シャンパーニュやボルドーなど、産地ごとにブレンド化されたワインがあり、フランスを代表する「文化」のひとつです。ここで言う「文化」は、ブドウ畑の歴史に始まり、ブドウの栽培法、収穫の時期、ブドウからワインへの醸造技術、味覚の判定、味わう時のマナーや料理の種類など、ワインに関わる全プロセスを指しています。ビン詰めされたワイン商品だけを、「文化」と言っている訳ではありません。このちがいが、フランス語の“culture”と日本語の「文化」の言語ギャップです。

これを突き詰めて行くと、古代ローマ時代の土地制度や市民権の問題、耕作する人々のことまで書くことになってしまいます。つまり、“colonia (植民地域)” “colonus (植民耕作民)” って何なの、という話になってしまうので、詳しくは書きません。

結論を言うと、「ローマ市民権やラテン市民権を持った人たちが、新しい土地に入植し、その土地を開墾し、耕してローマ風の作物を育てる技術や産品、ローマ風に近い生活スタイルや習慣」を、“cultûla”と言ったとワタシたちは考えます。周辺地域に対して優位にあると考えられていた、ローマ基準の農耕技術や生活様式が、“cultûla”という解釈です。大和勢力の農耕技術が、他地域より優れていると考えられたから、

それを「文化」と捉えるような思考パターンです。だから戦後の日本人は、現代的生活を「文化生活」としたのでしょいか。

● 「文化」に込める田園風景

 のように、“culture”を深掘りして行くと、奥深いものになります。特に「農耕」との関係は、「文化」が抱える大きな課題です。これが入らないと、「文化」を“culture”の訳語にできないとさえ言えます。

ワタシたちは、この問題をどうしようかと悩み続けました。今も悩んでいます。そうしている間にも、日本語の中に「カルチャー」が入り込んでいます。

「それはカルチャーの問題だから」と言う時の「カルチャー」は、何を指しているのか、そして、どう理解されるのか。こちららも、大きな問題なのです。

ワタシたちは、「耕す」ことから生まれる“culture”を、できる限り「文化」に込めたいと考えています。やはり、“culture”の対応語とするからには、どうしても除外できないのです。ワタシたちの「文化」の定義は、以下のとおりです。

文化とは、人々の食糧生産技術を基本にした固有の生産プロセスや生産品、その加工技術、それに伴う生活様式、その生活用品などの生産プロセスや生産品、その言語、知識、科学、芸術、歴史、伝統、宗教、習慣などの総称（田園的要素が強いケースが「文化」、都市的要素が強いケースは“civilization”の訳語とする）

ワタシたちは、田園性と都市性を、日本語で切り分けて使いたいのです。

(2017年9月13日)

※参考になされた書籍) 桑名一博編『西和中辞典』(1987年2月、小学館)、福井毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』(1989年、旺文社)、国松孝二編『独和大辞典』(1990年1月、小学館)、岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』(1977年、研究社)

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
「文化」という日本語

2017年9月12日（初版）発行

著者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。